埋文とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2005.10.1
VOL 92

縄文中期の深鉢形土器。中央の渦巻き紋が特徴的。角を伸ばしたカタツムリが、愛らしく歩いているようにみえる。自然とともに生きた縄文人の姿が、目の前に浮かんでくるようだ。
朝日町境A遺跡出土　　重要文化財

連載企画●とやま発掘物語2
埋文あらかると●展示解説ボランティア
とっておき埋文講座●ドイツの遺跡保護と考古学研究
私のおすすめ●イノシシ形注口土器
Center　Flash●企画展「越中瀬戸の世界」
行ってこられよ●宇奈月町歴史民俗資料館

富山県埋蔵文化財センター

連載企画

とやま発掘物語2

北高木遺跡－古代の祓えの場－

大遺跡の予感

大島町の北高木遺跡で、企業団地の造成に先立ち試掘調査が行われた。出土した遺物の中に「介」と記された墨書土器があった。介は「すけ」と呼び、律令制で国の次官を指すことから、国司に関わる遺跡ではないかと注目された。期待のなか、平成４年から本格的な発掘調査が開始された。

掘立柱建物・川跡などの遺構と、土器・木製品などの遺物が見つかった。驚いたのは、奈良・平安時代の川跡で、掘れば掘るほど土器や木製品が出た。土器と木製品が層をなしている箇所がいくつもあり、取上げの記録が間に合わないこともしばしばで、忙しくも嬉しい悲鳴をあげる毎日だった。

全景

木簡

出挙木簡が出土

一方に焼け焦げた跡のある小さな木切れが、川底にへばりついていた。長さ13センチメートル、幅２センチメートルの大きさ。その表裏にいくつかの文字が書かれているのが何となくわかった。

赤外線を投影すれば読めるので、早々に埋文センターに持ち込んで解読した。

すると、表には１１文字、裏には８文字分が浮かびあがった。

表「本利并七十五束又同本利」

裏「□□又五十□□□」

出挙（すいこ）制度に関する木簡であった。「本利」の本とは元本のこと、利とは利息を意味する。つまり、「貸し付けた種籾分とその利息分を合わせると75束。また同じく貸し付けた種籾分とその利息分を・・・」という意味だ。

奈良時代の出挙制度の利息は５割なので、春にこの農民に貸付けられた種籾が５０束であると、収穫時に利息を加え納める種籾は75束となる。

いつの時代にも取り立てる者、取られる者がいるものである。

木簡と墨書土器

木簡は、出挙木簡のほかに９点出土した。「□万呂二合　六月廿七八日米三升　□万呂１升二合」

のように人名、日付、数量の記された帳簿用木簡、「小黒六斗」のように品名と数量が記された付札木簡。習書木簡として、同じ文字が連続するもの、幾人もの人名が繰り返されているもの、文章の下書きと見られるものがある。

なかでも習書木簡は５点と多く、当時も現在と同じで、字の練習や文章を書く前に下書きをしていたことがうかがわれ、親近感が感じられる。

墨書土器は約200点あり、その大半は須恵器に書かれている。

蓑万呂・秋万呂・小野殿のように人物を示すもの、木・林のように物を示すもの、一・二・十のように数字を示すもの、西のように方位等を示すものがある。大・中・法・成・仁など意味が読み取れないものもあるが、一字が圧倒的に多い。「佐見御庄」と書かれたものがある。「西大寺資財流記帳」に見える新川郡「佐味庄」との関係は不明だが、注目される資料である。

また、これらの文字の筆跡から、識字者が複数いたことは明らかである。文献史料が乏しいこの時代、しかも都から遠く離れたこの地で、これだけの文字資料が確認されたのは驚くべきことである。文字ではないが、珍しい物が出土した。一面には、ウサギなどの動物や草木文様が、他面には五つの草木文様が彫られている版木である。全国でも例を見ない。

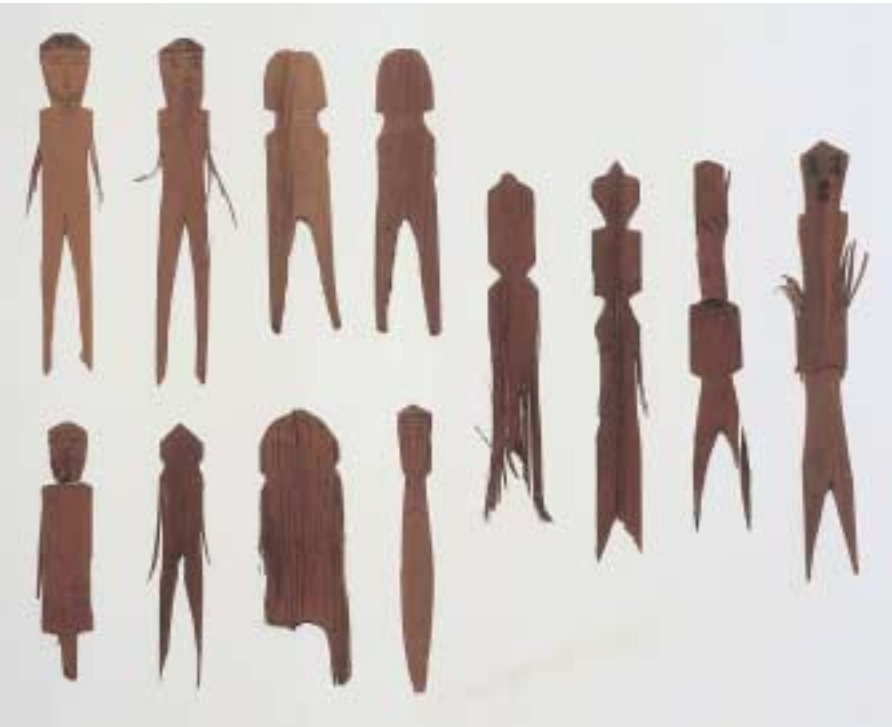
祓えの場

川跡からは、土器とともに、人形（ひとがた）、人面墨書土器、斎串（いぐし）など祭祀具が大量に出土した。

人形は県内初例で、40体を確認した。頭胴手足が表現されているもの、頭胴足のバランスが悪いもの、頭部に突起をもつものなど、形はさまざまである。

人形は自分の身代わりと考えられているが、なかには人間とは似つかぬユニークな形をしたものもあり、当時の人々が人形に託した想いを形でみることができ、おもしろい。

顔の表情が描かれているものが７体あり、うち３体は頭部に烏帽子を描いたものである。烏帽子をかぶる高貴な人物が、この地に関わっていたことがうかがえる。



人形

人面墨書土器

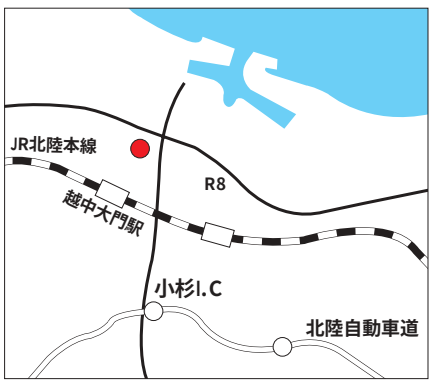
人面墨書土器は４点出土した。身についた穢（けが）れを封じこめるためにつかわれた土器で、ひげづらでいかめしい顔が描かれ、底には穴があいている。

また、木製で疑似化された馬・鳥・舟・刀・鏃（やじり）も出土した。これらは病気や穢れを運び去ったり、退治したりしてくれると信じられていたものである。

祭祀具の出土状況から見て、祭祀具は流れずにそのまま埋まったものだと考えられる。このことは、この場で祓（はら）えの儀式が行われたことを示している。

当時の都では、人形、人面墨書土器、斎串などの祭祀具を使った祓えの儀式が貴族の間で大流行していた。

都で、はやりの祭祀具の大量出土は、都での生活経験者、都のようすを知ることができる人物や烏帽子着用者などが、この川辺で祓えの儀式を行っていたことを物語っている。　（安念　幹倫）



JR北陸本線越中大門駅から車で10分
北陸自動車道小杉I.Cから車で15分

埋文
あらかると

展示解説ボランティア

とある日の昼下がり、ロビーに楽しげな声が響く。そっと覗いてみると、ボランティアの皆さんの笑顔また笑顔!誰とはなく遺跡の話に花が咲く。即興の学習会だ。

また展示室に目をやると、これまた笑顔で親子連れに展示物の解説。これが休日のセンターの一コマである。

ボランティア　誕生！

一昨年の4月から休日開館がスタートした。同時に展示解説ボランティアの養成が始まった。期間は1年間。歴史への関心があり、休日に活動できる方を対象に講座を開いた。なかには考古学のイロハを学んだ方、発掘を体験した方もおられ、20名あまりの人が集まった。

学びは楽し！

講座の内容は、テキストによる時代概説を中心に行い、勾玉作りや火おこしも体験した。また、富山市の北代遺跡でボランティアによる遺跡解説や体験談などを聞き、生の姿や声を見聞きして、見識を深めた。一連の講座を終えたあと、企画展ごとに行う展示学習会で解説のポイントを学んだ。

北代縄文広場での研修

研修を重ねていくにつれ、もっと学びたいという声があがり、新たに冬期にも学習会(3回)を開くこととなった。どの研修でも数多く質問が飛び交い、旺盛な学習意欲には頭がさがる思いである。

冬期学習のようす

いちおし！研修旅行

なかでもいちばんの楽しみは、視察研修。考古資料を展示した博物館などを訪ねるものだ。昨年は、リニューアルオープンした福井県立歴史博物館。一昨年は、火炎土器で有名な馬高(うまだか)遺跡の地にある新潟県立歴史博物館を訪れた。

福井では、展示の常識を覆(くつがえ)す、現代から古代へ遡(さかのぼ)る展示やキャプションを工夫し展示物を主役にした展示方法など、斬新なアイディアにみな目が点になった。

また新潟では、縄文時代のムラにタイムスリップしたかのようなジオラマや縄文土器の美しさを最大限に引き出す土器の展示など、来館者を驚かせるテクニックに思わずため息が出た。このような展示の視点や工夫を直接、学芸員から聞いたことで、展示に対する理解が深まり、ボランティアの役割がより鮮明になったようだ。

この貴重な経験を共有したことで、ボランティア同士のつながりもいっそう強くなっていった。

体験広場は交流の場

現在は、20名あまりの方がボランティアに登録されている。30歳代から80歳代までと幅広い。半日単位で月1～3回程度、皆さんの都合にあわせて活動していただいている。

研修を重ねた成果がしだいに表れ、どなたも自信をもって懇切丁寧に説明されている。「わかりやすい解説だった」「とっても親切にしてくれた」など、来館者からも好評を得ている。

また、体験活動にも意欲的。勾玉作りや火おこしの指導を子どもたちや親子連れに進んでされている姿を何回も見かける。ポイントを説明するだけでなく、励まし、笑顔を絶やさず声をかけておられる。まさに世代を超えた交流の場であり、それを楽しみにされている方も多い。

ボランティアによる解説

やってて、よかった

ボランティアの活動日誌には、いろいろな声が載っている。「解説していると、とても時代に詳しく、逆に教えていただいた」「武具に詳しい方が来館され、時代考証に役立った」など、学ぶ機会があったことに喜びがうかがえる。

また、「こんなに数多くの土器が並んでいる展示は初めて」「子どもたちが、土器の文様づけに夢中になった」など、展示のねらいに気づいてくれたことにも感慨深げ。

ボランティアの回数は決して多くはないが、活動するたびに人との出会いがある。心と心の通い合いに楽しみを求めておられるようだ。

担当者としていちばんうれしい言葉がある。それは、「やってよかった」。これからもボランティア活動が長く続くことを願っている。　（上野　章）

ドイツの遺跡保護と考古学研究

とっておき埋文講座

首都大学東京（東京都立大学）教授　小野　昭
Ono　Akira

枠組みの違い

日本では1999年に文化財保護法が大きく改訂され、国の権限の多くが地方公共団体に委譲されましたが、1国1法制の枠はもちろん変わっていません。

ところがドイツは、文化財保護法に関しては1国16法制です。つまり邦（ラント）ごとに分権性が極めて高いのです。

例えばミュンヒェンが首都のバイエルン邦では、邦の憲法に規定されている基本権よりも記念物保護法が一部優先することが明確に規定されています。

1国の中に16の異なる文化財保護法ないし法令が並存している状態を考えてみてください。敗戦後のドイツ連邦共和国政府は文化には直接口を出さない「文化高等政策」を貫いています。

修復・復元問題

実大復元は魅力的です。しかし、賛否多様な意見があります。発見された遺構の修復にとどめるべきか、それともそれ以上の復元をすべきか。

残っていない上屋の構造まで復元するのは記念物保護の目的なのか。また復元は「仮説と可能性」であって、見学者にそれがわかるようにしておくべきであると議論されています。

遺跡整備のはじまり

公開・活用をはっきり目的とした整備は1977年のクサンテン考古学公園にはじまります。紀元100年ころのローマの都市を発掘し、順次、市壁、神殿、円形劇場などを部分復元して、一般に公開をはじめたのです。いままでに5470万ユーロ(約70億円)が投入されました。年間入場者数は30万人を超え、地域経済の活性化の点からも肯定的に評価されています。

ケルトの防御集落ホイネブルク

これは、バーデンヴュルテンベルク州にあります。防御集落を野外博物館として整備したものです。発掘遺物を展示してある博物館とケルトの首長の墳丘墓、民衆墓を結びつけて全長8キロの考古学遊歩道としてまとめたところに特徴があります。中心は紀元前6～前5世紀です。

学校の生徒のために特別のプロジェクトが博物館プログラムとして組まれています。じっくり回れば、ほぼ一日がかり。「歩かされていやだ」と思うか、「歩けるのでうれしい」と思うかが分かれ目でしょう。

ドイツの特徴

遺跡公園・考古学公園・野外博物館構想の背景にドイツに共通する特徴があるのでしょうか。それには視点を変えて「散策地図」や「休暇地図」を見ると良いかもしれません。実はこうした地図の中に考古学的な遺跡が位置づけられています。森の散策によって今の自分の生活を楽しむ一環としての遺跡公園です。

「あしたドーナル」

保護法のあり方は、玉ねぎの皮をむくような「入れ子構造」ともいうべき状況です。例えばEUレベルでは国ごとに保護法の体系が異なります。その中には国民国家レベルで統一した保護法を持っているところと、ドイツのように統一した単一の保護法を持たない国があります。

また「原因者負担の原則」の問題は世界各国で苦心しています。バイエルン邦においても、1990年代の初頭から増大する緊急発掘調査に、発掘株式会社の参入が目立ちはじめ、この原則を保護法の条文にどう明文化かするか論争中です。

各国で文化遺産の保護システムは大きく異なり、その文化的背景を理解しない限りその違いの理由も理解できません。文化的な差が顕在化する文化遺産の保護システムを調査していくことは、その国と地域の文化的背景をいっそう詳細に探っていく新しい対象ではないでしょうか。

（埋蔵文化財発掘調査専門職員等特別研修会
2005年5月27日の講演から）

イノシシ形注口土器

ユーモラスな姿

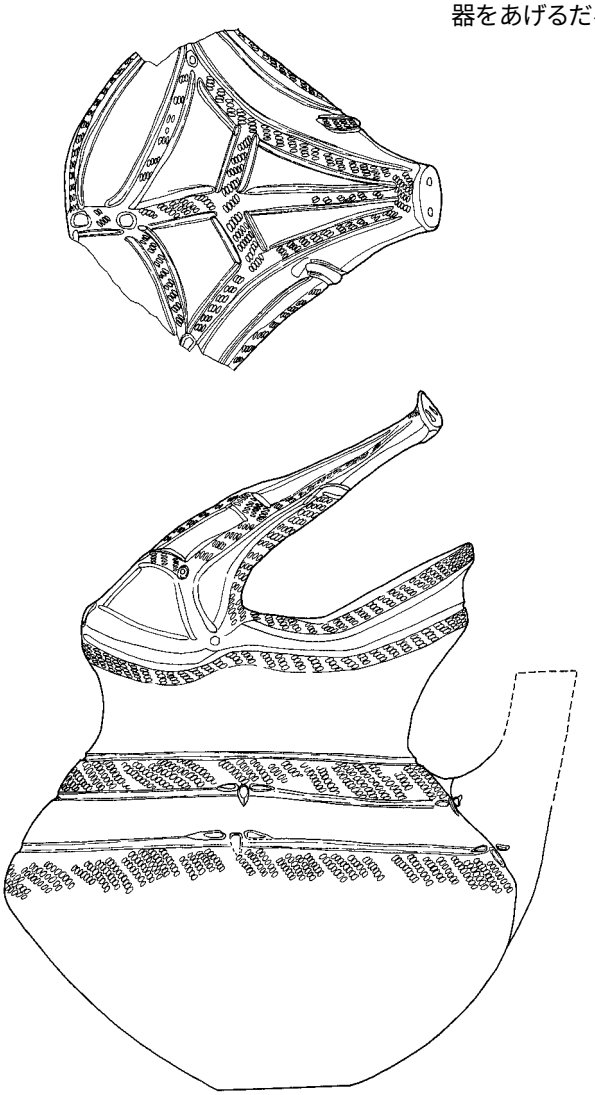
昭和54年の発掘調査で、南砺市井口遺跡からイノシシ形をした注口土器が出土した。今から約3000年前の縄文時代後期末葉の時期のものである。注口土器は、縄文時代の後期から晩期にかけてさかんに作られた土瓶形の土器で、液体状のものを入れて注いで使った。

井口遺跡のこの土器は、蓋にあたる部分を半開きにしたようなユニークな形で、イノシシが口を開けた姿を縄文土器造形のなかに巧みに取り入れている。

蓋状の部分を上から見てみよう。長く伸びた鼻は、まさにイノシシそのものだ。上あごの両脇には突き出た牙が描かれている。さらに沈線で区画して縄文を施す帯状の文様は、やや抽象化されているが、目を表わしているようにもみえる。

高さ18.3センチメートル、直径13.5センチメートルの小振りな土器であるが、そのユーモラスな姿は見る人の微笑と感嘆を誘う。

このような形の注口土器は全国で唯一のもので、縄文人の造形に対する素晴らしい感性がうかがえる。県内から出土した縄文土器で最も好きなものはと問われたら、私は躊躇（ちゅうちょ）なくこの愛らしい注口土器をあげるだろう。



イノシシ形土器実測図（1／2）

イノシシとシカ

狩猟採集社会にあった人は、イノシシやシカを捕獲して食料とした。貝塚や低湿地性の遺跡などからは食べかすとして、それらの骨がよく出土する。また、肉ばかりでなく皮や角、牙などもさまざまに加工され、生活用具や装身具として使用された。

イノシシとシカは最も重要な狩りの獲物であり、生活に欠くことのできない資源であった。当然のことながら、乱獲を避け、永続的に得られるよう様々な工夫がなされたことだろう。また、イノシシの幼獣―ウリボウ―については、捕獲して飼育していた可能性が高い。

イノシシ形土製品

土偶に代表される縄文時代の土製品の一種に、イノシシ形土製品がある。イノシシの姿をリアルにかたどった10センチメートルほどのミニチュア土製品で、東日本各地の後期・晩期の遺跡から出土が報じられている。

これらとは時代や形が異なっていて直接の関連性はないが、県内では小矢部市の高木山遺跡から縄文時代中期前半期のイノシシ形土製品が出土している。

シカにはみられない、このようなイノシシ形土製品の存在は、縄文人のイノシシに対する特別の思い入れを考えざるをえない。銅鐸や弥生土器にシカの絵をよく描く弥生人と対照的である。

イノシシの復活

7、8年前のこと、弥生時代の銅鐸がまとまって出土した出雲の加茂岩倉遺跡を訪れたときである。銅鐸が出土した丘陵の裾一面には、稲穂が黄色く色づいていた。その田んぼの中に幅50センチメートルほどの一直線の踏み分け道がつけられていた。イノシシが通った跡と聞かされて驚いた。近年は北陸でも、イノシシが増えてきているという。このような光景を間近で目にするのも、遠いことではないかもしれない。　（山本　正敏）

Center Flash

平成１７年度企画展

「越中瀬戸の世界」

ふるさとの優れた焼き物である越中瀬戸。その歴史をたどるとともに、
当センター所蔵の越中瀬戸の優品を紹介します。

会　　期　平成１７年１２月１２日（月）から
平成１８年　３月１６日（木）まで

開　　館　９時～１７時

休 館 日　金曜日（ただし、祝日のときは翌週最初の平日）
年末年始（12／28～1/4）　**入館無料**

行ってこられよ —《22》

今度の休日、ちょっと出かけてみませんか。

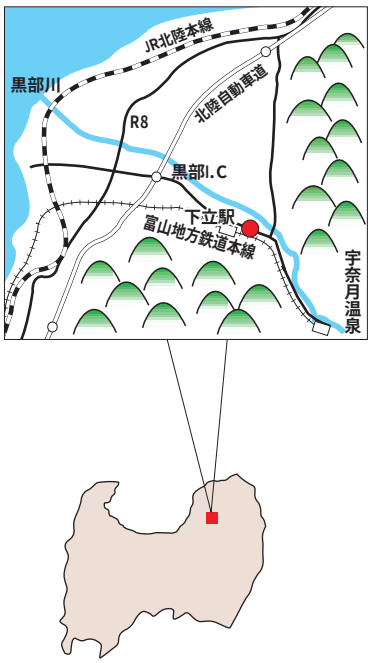
宇奈月町歴史民俗資料館

宇奈月町下立

美しい刎橋として名を馳せた「愛本橋」の近くに資料館はあります。平成５年４月、道の駅のオープンと同時に“うなづき友学館”に併設されました。町の歴史・民俗をはじめ、自然や温泉開発の資料などを収集・展示しています。

11月6日(日)まで、特別展「宇奈月のあけぼの―縄文時代を探る」が開かれており、一堂に会した縄文土器の姿は圧巻です。

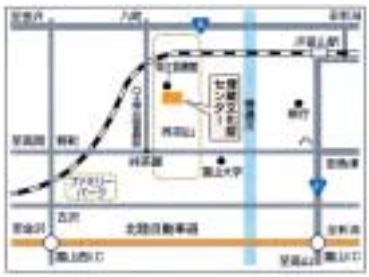
ＴＥＬ：０７６５－６５－１０１０
開館時間：９時３０分～１８時　　※入館は１７時３０分まで
入館料：大人３００円、小中学生無料
休館日：月曜日（祝日の場合は水曜日）、祝日の翌日、毎月末日



■近くには、富山県一の規模を誇る“宇奈月温泉”があります。
■名物のトロッコ電車で、赤や黄に染まった峡谷美をどうぞ。
■富山地方鉄道下立駅から徒歩5分、北陸自動車道黒部I.Cから車で5分。

編集を終えて

スポーツの秋、読書の秋。心地よい風は、文化の香りを運んできます。
この秋センターでは、地域展「発掘された富山」を開催します。
さわやかな季節に、富山の古代ロマンに浸ってみてはいかがでしょう。（今）



富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」vol.92

平成17年10月1日発行　編集／富山県埋蔵文化財センター　〒930-0115　富山市茶屋町206-3　TEL 076-434-2814
URL http://www.pref.toyama.jp/branches/3041/3041.htm　E-mail maizobunka@pref.toyama.lg.jp

再生紙を利用しています

富山県